



SDGs に想う (嵩高な目的と過去の残虐行為)

12 月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2020 年 12 月 20 日(日)

社会・環境の持続可能性について、ニューヨークの国連本部において、2015 年 9 月、「誰一人取り残さない」、2030 アジェンダ持続可能な開発目標(SDGs)が採択された。

この「誰一人取り残さない(No One Left Behind)」というコンセプトを、各分野別の目標としてまとめた、持続可能な開発目標(SDGs)は文句なしに期待できるものだと思う。

国境を越えた企業活動が活発に行われている。

その一方で、グローバル化による成長の恩恵から取り残された地域における極端な貧困や格差の問題を解決することなしには、**持続可能な成長は不可能である**という認識は正しいと思う。

しかし、SDGs は、ESG の 3 項目、**環境、社会、ガバナンス**を多項目に拡大しただけのもので、質の深化、拡大はない。

前向きな美しい目標をかかげるだけでよいのであろうか。

私は SDGs には、過去の反省が欠落しているように思う。

地球の限界について、人間の活動が、安全の範囲にとどまれば、人間社会は発展・繁栄することができるが、**その境界を越えると**、自然資源に回復不能な変化が引き起こされる。これらに対する**改革の実質に SDGs は乏しい**。

すでに、**生物多様性、気候変動、生物地球科学環境、土地利用変化**の 4 つについては、その境界を越えていると言われている。

SDGs 「誰一人取り残さない」に欠けているのは、**過去の反省**である。

「人はパンのみにて生きるのではない」、経済的目標は最低限のものとして必要であるが、精神的な充足と公平感はそれを越えて重要であると思う。

過去の反省、その最もたるものは、**原爆の投下**である。原爆投下の理由は、**原爆を投下して、悲惨な戦争を終わらせることができた**というものであった。それは最も悪質な言い訳である。

敵国であったとは言え、無抵抗であった、一般市民 18 万人を一瞬にして死亡させた行為は、**言い訳のできるものではなく、20 世紀最大の悪事、残虐行為**ではないか。

このような悪事を過去のことに忘れ、表の明るい面だけを照らし出し、嵩高な目標に向かっているという態度は、最悪であり、そのような心根で嵩高な目標は達成できないのではないかと思う。